

ツキノワグマの話

山崎晃司（茨城県自然博物館）

ツキノワグマ (*Ursus thibetanus*) は本州最大の陸生哺乳類で、その生活を担保するために多様な植生を含む広大な生息環境を必要とする種といえる。ツキノワグマが安定して生活できる環境には、他の多くの動物種の生存も約束されるため、アンブレラ種とも呼ばれる。

しかし一方で、本州ではこの十年ほどの間に、“ツキノワグマの大量出没”と表現されるツキノワグマの人間生活空間周辺への侵入事例が多発しており、数多くの人身被害や農業被害の発生と共に、ツキノワグマの側も数千頭の単位で有害あるいは管理捕獲（捕殺を含む）がなされている。

こうした機序の解明とその抑止のためには、行政が主体となつての地域個体群動態の継続的なモニタリング体制の構築と、その結果の管理施策への順応的な還元といったプロセスが必要不可欠であるが、実現できている自治体は少なく、いまだに場当たりの、ガス抜きの捕獲が頼りどころの選択肢として実施され、また捕獲個体からの科学的データの収集もおおざなりにされている事例が残念ながら見受けられる。予算や専務的人材の不足がその根幹的課題として指摘され続けているが、この状況が長い間大きな改善をされていないことも痛恨である。

演者は、ツキノワグマという種の生き様についてもっと知りたいという科学的好奇心と共に、その適切な管理施策の提言のための基礎的情報の蓄積を目的として、長期的なツキノワグマ研究プロジェクトの維持を目指している。その組織や成果はまだ不十分で課題も山積するが、1991年より奥多摩山地、2003年より日光・足尾山地において、特にツキノワグマの行動生態に関する研究を進めている。海外では、長期的研究体制の実例をいくつも見るができるが、例えば北欧（ノルウェーおよびスウェーデン）でのヒグマ研究プロジェクト（Scandinavian Brown Bear Research Project: <http://www.bearproject.info/>）は、1984年に始動して現在まで連続と継続され、国や自治体と協働しつつ、数多くの人材の輩出、論文や報告書の刊行、ヒグマ管理計画への大きな貢献を続けている。

本発表では、群馬県も含む日光・足尾山地での研究結果に加えて、演者が所属している日本クマネットワーク (<http://www.japanbear.org/cms/>) が実施している、いくつかのツキノワグマ関係プロジェクトの結果を併せて紹介しながら、現状の要約と今後求められるツキノワグマの管理体制について言及したい。

今回の発表時間は限られているため、個々の研究結果の詳細に触れることはできないが、一例として、ツキノワグマのオス成獣の行動圏利用を以下に示した。このオスグマは、堅果結実の通常年には山地帯にその生活を閉じていたが、堅果不作年に低標高地の養魚場に居着くようになり、最終的に捕殺処分となった個体である。山から降りて旨いものを発見したオスグマは、昼行性から夜行性にその行動を変え、昼は養魚場から離れずすぐ脇で休息をするという生活様式を獲得した。擬人的な見方をすれば、何か悪いことをしている人間のような行動様式である。これらのデータからうか

がい知れることは、ツキノワグマも人間と同様に「味を占めれば」、「楽をしたくなる」生きものであり、一度問題を起こしたツキノワグマの管理の困難さを示すと共に、通常時からの適切な軌轢を予防するための策を講じることの必要性を教えてくれる。こうしたツキノワグマを捕殺することは極めて簡単明快な措置であるが、なぜこのような事態が起きたのか、またその予防にはどのようなことが想定できたかについて、関係する機関の役割分担と共に考えることが本当に必要な部分である。

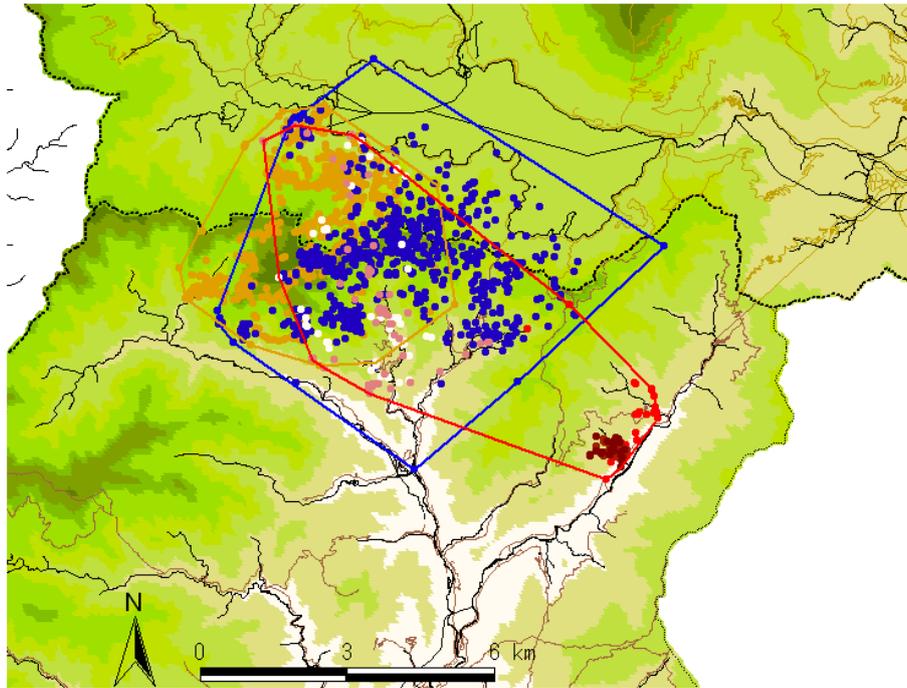


図 1 ツキノワグマオス成獣の経年的な行動圏（各色のドットと多角形は各年の行動圏を示す）

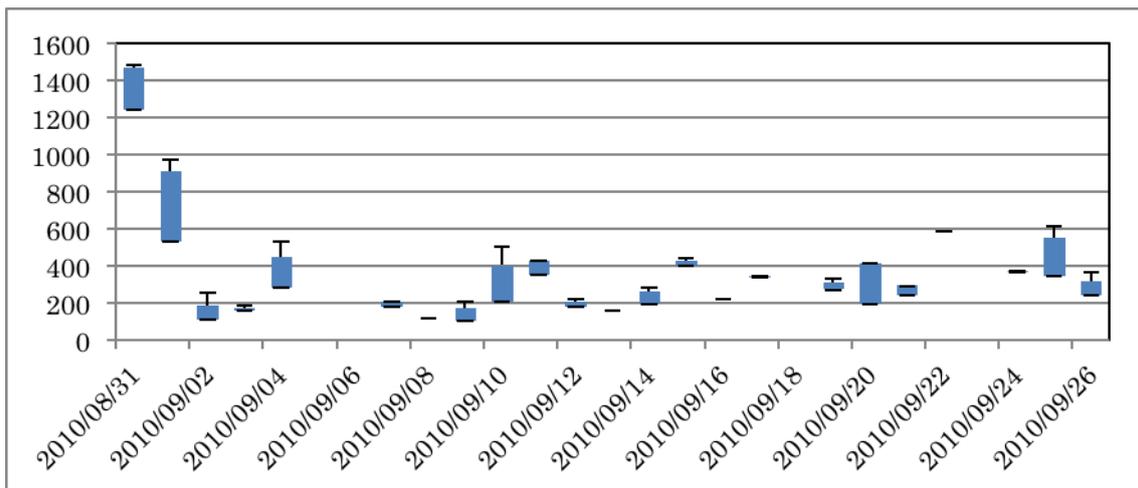


図 2 ツキノワグマオス成獣の日中の休息点の養魚場からの距離（9 月以降に養魚場に出没するようになった）

キーワード：ツキノワグマ，日光・足尾山地，分布域管理，個体管理